真に「学ぶ」授業の在り方とは
―国語科を中心とした授業改善の可能性を探る―

高度学校教育実践専攻　　実習責任教員　藤　井　　伊佐子
教職実践力高度化コース　　実習指導教員　前　田　　洋　一
林　　洋　美

キーワード: 授業改善，主体性，他者とのかかわり，きく力，若手教員

Ⅰ　研究課題設定の理由

１　問題の所在

これからの時代を生き抜く子どもたちには，社会の変化に主体的に対応し，社会を創造していく力が求められる。平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領では子どもが主体的に学ぶことの重要性が強調されている。では，主体的に学ぶこととはどのようなものであろうか。

一方で，近年の大量退職・大量採用による若手教員の増加に対し中堅の教員数が極端に少ないことから，文部科学省からは指導技術の伝達が難しくなってきているとの指摘がされている。

これらの課題を受け，本研究では学習者の主体性と若手教員の授業力向上のための授業の在り方について実践を通して考察していく。

２　実習校の概要と課題

実習校は，児童数 388 名。学級数は 17 学級（うち特別支援学級４）の中規模校である。

昨年度から３年連続で社会科の大会を受け，学校を挙げてその研究に取り組んでいる。このことから，研究大会が終わるまでは社会科以外の授業研究会をもつことは難しい現状がある。

そのような中，ここ数年で教員の年齢層も急激に若くなってきている。

Ⅱ　先行研究・先行実践校の概観

１　先行研究：出力型授業

小西（関西福祉科学大学）の提唱する「出力型授業」とは，子どもの多様なこだわりや意見を出し合うことによって，知識を活用し，認識を新たにするとともに判断力を高めていく授業（⇒価値観偏差縮小型授業）のことである。

２　先行実践校：富山市立堀川小学校

堀川小学校では，受け継がれてきた日々の実践から教育活動全体において教師の「きくこと」に対する真摯な姿勢をうかがうことができる。

Ⅲ　実践研究の実際

１　目的

（１）児童の学びの質を高めるための「授業」の在り方を探る

（２）若手教員とともに国語科の授業実践を通して「授業力」がいかに育まれるのかを検証する

２　研究の対象と方法

（１）研究の対象

①第２学年と第４学年の児童を対象とする

②採用２年目の教員を対象とする

（２）実践の方法

①１回目は，「主体性」「他者とのかかわり」「きく力」の３つの視点を基に筆者が指導案を作り，筆者が一単元授業実践をする

②２回目は，同じ３つの視点を基に若手教員と筆者が授業をつくり，若手教員が一単元授業実践をする

（３）評価の方法

①児童：プレポストのアンケート

②教員：プレポストのアンケート

実践後のインタビュー

3　提案授業

（１）２年生

①教　科　：国　語（光村図書）

②単元名　：「たんぽぽのちえ」

③授業期間：５月１日から５月１５日

④具体的な指導内容

主体性
・毎回，課題決定と振り返りの時間を設定 ・「ちえブック」の作成
他者とのかかわり
・一連の流れをグループで劇化 ・ホワイトボードを用いてグループ活動
きく力
・友だちの意見につなげての発言 ・相手の考えを知る時間を確保

（２）４年生

①教　科　：国　語（光村図書）

②単元名　：「大きな力を出す」
「動いて，考えて，また動く」

③授業期間：５月１６日から５月２４日

④具体的な指導内容

主体性
・毎回，課題決定と振り返りの時間を設定 ・１つの活動の中で一人一役
他者とのかかわり
・同じ視点で活動し，意見を交換する ・それぞれが書いた作文を読み合う
きく力
・自分と人の考えと比較しながらきく指導 ・人の意見を取り入れて，自分の意見を振り返ることを意識

4　若手による授業実践

（１）２年生

①教　科　：国　語（光村図書）

②単元名　：「スイミー」

③授業期間：６月１４日から６月２６日

④具体的な指導内容

主体性
・「スイミー日記」の作成 ・子どもたちが物語の一場面を動作化
他者とのかかわり
・みんなで魚になって場面を表現 ・自分の好きな場面を発表し合う
きく力
・自他の意見を出し合い，ホワイトボードを用いて，話し合いながらまとめていく ・「～のような」の表現を出し合う

（２）４年生

①教　科　：国　語（光村図書）

②単元名　：「『読むこと』について考えよう」

③授業期間：７月１１日から７月１８日

④具体的な指導内容

主体性
・個別に課題を設定 ・活動を自分のこととして捉える
他者とのかかわり
・交流の時，子どもたちが具体的に視点をもち活動に入る ・ほかの人の表現に触れることで，自分の表現に生かす
きく力
・個別にきき合って，学び合う場を設定 ・交流の後に意見交換をする場を設定

Ⅳ　結果

1　児童の変容

実践前と実践終了時点のアンケート結果を研究の３つの視点に対応させ，以下に示す。

アンケートの「あてはまる」「だいたいあてはまる」を肯定的な回答として集計し，パーセンテージを記す。

（１）主体性

項　目	学年	プレ	ポスト
国語の勉強をすることは，将来，役に立つと思う	２年	８５	９３
	４年	９３	８９
今日の勉強で何をしたらいいか分かっている	２年	７８	８５
	４年	８３	８５

（２）他者とのかかわり

項　目	学年	プレ	ポスト
分からない問題は友達と教え合っている	２年	７４	７８
	４年	７２	８１
授業では話合いや，発表などの機会がたくさんある	２年	７０	７８
	４年	６６	７０

（３）きく力

項　目	学年	プレ	ポスト
人の話を大切に聞いている	２年	８１	９３
	４年	８６	８９
授業で人の発表や，意見を聞くことは役に立つ	２年	８１	９３
	４年	８３	８９

（４）基礎となるもの

また，本研究で取り上げた３つの視点以外にも，授業や学級経営の基礎ともなる重要な項目において見られた変容を以下に示す。

項　目	学年	プレ	ポスト
自分もやればできるという気持ちがある	２年	７４	100
	４年	７２	８１
自分は周りの人（家族,友だち,先生）からみとめられている	２年	６７	８１
	４年	４８	６３
周りの人は自分のことを心配してくれる	２年	６７	７４
	４年	７６	７４

２　教師の変容

（１）A 教諭：2 年担任

	実習前	実習後
教材研究	理解の早い子のことばかり考えていた。	考えをもつことが難しい子や集中できない子にはどうしたらいいのかと複数の視点で授業を考えるようになった。
授業	国語の授業をすることは嫌いだった。子どもの反応があまりなかった。分かっているのかなと不安になっていた。	今は好きだ。やり方が分かってきた。どこで子どもたちが喜ぶかも分かってきた。子どもたちの反応が見えると，「ああ国語って面白いな」って思うことが増えてきた。
今後	子どもの実態に合った指導方法を実践することの大切さを学んだ。その子どもに合っていないとみんなつまらないんだと思った。どんな方法があるのかを（私自身）身に付けていかないといけない。	

（２）B 教諭：４年担任

	実習前	実習後
教材研究	授業の流し方を見ていた。	単元全体をもっと意識して考えるようになった。考えないと分からないんだということに気付いた。学習計画を立てたいと思ったこともその一つ。
教科指導	自分もあまり得意でない。どうしたらいいか分からなかった。	（教え方が分からない時は）ある。でも１年目と比べて感覚は全然違う。落ち着いて子どもを見ている。どうやったら，子どもたちがやってみようと思うかがなんとなく見えてきた。
授業	国語の授業をすることは嫌いだった。	今は好き。子どもが教材内容を理解した瞬間を感じ取った時。国語は大嫌いだけど，子どもと一緒の気持ちになるのは好きである。国語の楽しさを感じる。

Ⅴ　考察

本研究は，「児童の学びの質を高めるための『授業』の在り方を探る」「若手教員とともに国語科の授業実践を通して『授業力』がいかに育まれるのかを検証する」視点から展開された。その結果，教師・児童の双方において肯定的な意識の変容が見られた。このことより，本研究は有意な実践であったといえる。

１　調査結果の分析から見た成果

（１）児童

①自分の気持ちや考えを自主的に書くようになってきた。子どもから「自分の考えを書いてもいいですか。」と問うようになった。

②課題に興味をもち，相手に自分の考えをうまく伝えたいという気持ちが芽生え，一生懸命に課題に取り組んでいた。

③積極的に課題に取り組んだり，試行錯誤しながら書き直したりする姿が見られるようになった。

④自分の学ぶ姿勢を自分で見つめられるようになった。

⑤学習が終わった後に，子どもが学習を自分の生活につなげていこうとしていた。

（２）教員

①ただ単に教えるというのではなく，子どもの実態に合った指導の大切さに気付いた。

②様々な指導法をもっと身に付けていきたいという意欲が生まれてきた。

③指導案を立てる時，子どもの姿をずっと考えていた。

④単元全体をもっと意識して考えるようになった。

⑤子ども同士の学び合いによって，子どもの力をぐっと伸ばせる可能性に気付いた。

⑥授業において何が大切なのかを考えるようになり，次の課題や方向性を見つけられる。

２　今後の課題

今回の研究で取り上げた「主体性」「他者とのかかわり」「きく力」の視点から指導内容や授業をつくることは，「どの教員でもできる」ことが前提である。パターンにはめ込んだ通り一遍の指導を防ぐためには，教材研究がより重要になってくる。指導する教材の中で押さえておくべきことは何であるかを教師がつかみ，それを土台に単元を組み立てる。並行して，教師が単元全体構想や授業の前後のつながりをつかんでおく。言い換えれば，教師が見通しある指導計画をもつということである。最終的には，それを達成するために子どもたちにはどのような手立てが有効であるかを考えながら，具体的な展開を考案していく。目の前の子どもたちを中心に据えることにより見えてくるのである。

この一連の流れをおろそかにしては，真に「学ぶ」授業を実践することは難しい。

Ⅵ　今後の展望

新学習指導要領（平成 29 年３月公示）の総則において「授業改善」が文言として記載されるようになった。これは，教育現場において「授業改善」が求められることを意味している。

授業とは，目の前の子どもたちに応じたやり方を試行錯誤する教員の不断の努力と姿勢に支えられたものである。教師である以上，自分の力を過信せず，常に「授業とは何か」と問い続ける姿勢をもつこと。自分の指導を見つめ直し，自己研鑽を積むこと。そのような場に一人一人の教師がしっかりと身を置くべきである。「教師は授業で勝負する」，使い古された言葉であるが深い言葉である。

【参考文献】

文部科学省（2017）小学校学習指導要領